

第18回環境NPOリーダー海外研修 報告書

NPO法人アキハロハスアクション
Ak i h a 森のようちえん 藤井 朋子

Q1. 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のボランティアリーダーとして生かせるか。

A1. 主軸となる考え方

今回の研修は主軸になる物事の捉え方を元に様々な研修先で得た情報を整理しました。以下に記す考え方は今後も活動の中で主軸に置いて行きたいと思います。

(ア)顧客満足

自分にとっての顧客は誰であるかを見出し、顧客のニーズにあったアプローチを行う。

(イ)選択と集中

様々な情報の中から、何に重きを置いて必要な情報を取り出すか。

(ウ)為せば成る為さねば成らぬ何事も

何かを見て、素晴らしいと感動するだけでなく自分も即実行する。

その際に、できない理由を挙げるのではなくどうやったらできるかを考える。

A2.持続可能なNPOの活動の為にファンドレイジングを積極的に行う（以下主な項目）

ファンドレイジングとは：ソフトな方法で人々に善行を勧め、納得させること。

(ア)だれが・いつ・どのプロジェクトにいくら払ってくれるか目標を立てる

(イ)顧客のニーズの把握。顧客のデータベースを作成し分析する。

(ウ)お金は共感の印。感動を呼ぶコツは「ストーリーとプロセス、今まで体験した事以上の体験」を顧客に対して用意する事。

(エ)プロジェクトの意義を説得するのではなく納得してもらえるように、情報をデータ化、見える化する。(例：野外活動の効果を数値化したデータを見つける。又は専門家と繋がって、ようちえんの調査をしてもらう。)

(オ)寄附したくなるようにデータとストーリー性で理性と感情に働きかける。

(カ)寄附者にお礼。(例:メディアへの掲載、感謝の手紙、寄附による効果の情報公開)

(キ)広報活動を繰り返し行い、周知やに努め、同時に寄附者の顧客満足度の向上と企業寄附者のイメージアップに貢献する。

Q2.研修を通して、日本の環境ボランティアリーダーを支援するために、どのような仕組みが考えられるか。

A2.NPO が行う、環境教育を通じた人材育成

NPO が幼稚園、学校などの教育機関の園児や生徒と教育機関をスーパーバイズする立場の専門家や教育機関と繋げ、環境教育活動を行う。

NPO 側は地域の環境問題や環境保全の実情を知ったうえで、意図を持って自然と人のつながりを学べる教育の機会を専門家と共に作る。その際に具体的なプロジェクトに対する資金や道具、マンパワーの寄付を市民に呼びかけ、広告やSNS、HP、ニューズレター等で広報活動を行う。

学ぶ側は、環境について学びながら次世代を担っていく為に必要な体験的知識と自然への愛着を形成する。

NPO 側は専門機関と学ぶ側を繋げる上で問題意識をもって、こういったテーマが地域の環境活動に必要なかを調査する。そして地域の専門機関とつながることで共に地域の環境保全活動に取り組むパートナーシップを築くことを期待している。それは同時に新たに寄付を期待できる人達とのネットワークを広げていくチャンスでもある。

この際、NPO側のプレゼンテーション力、顧客満足度を高める力が問われる。専門機関は環境教育、人材育成への意義を今一度確認し、NPOと連携した環境保全、保護活動を促進するきっかけになることを期待している。長く活動を続けることで、NPOと地域の専門機関との信頼関係を構築し、いつかはNABUやBUNDのような大きなつながりや政治的に発言力のあるネットワーク作りに貢献できる可能性もあると思う。

Q3.全体を通しての感想

この度研修に参加させていただいて、自分の課題解決の糸口をつかめたと思います。

研修初日にこの研修での私の目標を以下のように設定しました。

「持続可能な社会、自然を作るライフスタイルの実践者となり、その実践を通じて知識と体験が一体となる環境教育、森のようちえんでの保育を深める事につなげる。」

研修中にNABUやBUNDといった環境保全、自然保護活動を行う団体を視察し、多岐に渡る意義深い活動に感銘を受け、環境省では、担当する内容が、政党が変わるごとに変わる事を聞き、NPOの専門家達とパートナーシップを組みながら水質改善や、ゴミ問題などに対する取り組んでいる事を学びました。

どの活動も私達人間と自然との繋がりのある内容で当事者意識を新たに致しました。私もそのような環境保全活動を地元で行いたいと思いつつ、これだけの内容にいかにか働きかければ良いのか分からない。このままでは、「素晴らしい取り組みを見た。」だけで終わってしまう。と少し焦りつつ、自分が日本に帰って学んだことをどう活かせるのか考えました。

私が所属する NPO 法人アキハロハスアクションの理念、「地域の自然体験を通し人生を豊かに生き抜く人間力の素地を養う」を元に主たる活動の顧客である「Akaha 森のようちえんの園児と保護者」の顧客満足度を高めつつ、地域からより広くインパクトを起こせる自然保護、環境保全を行う方法はないかと考えました。そこで出た答えは、保育者として環境に関わる専門機関や他団体と繋がりを持ち、子ども達に対する環境教育を行う事で、専門機関や他団体と共に NABU や BUND が行っているような環境保全活動を促進するきっかけ作りを行っていくということです。

そして自らがその活動を通じ、学び、環境保全活動を実践しながら保育者としての専門性をさらに高め、次世代を担う子ども達の成長をサポートしていきたいと決意しました。

文化省幼稚園教育要領にある 5 領域をバランスよく踏襲しながら、知識と体験がつながる野外教育活動が森のようちえんでの教育だと思います。

この研修でアプローチしていきたいと思った項目は、以下の通りです。

農業：地産地消促進、

洗剤：地元の川を汚さないような暮らし、洗剤に気を付けるなど個人レベルで出来ることを実践すること。

お庭造り：NABUのスタッフは施設の庭を生き物たちの住みやすい環境に整えていた。生き物の住みやすい環境について知ること。

水質改善：水質を適切に測定、管理する仕組みがあるのか等、地域の実情を知ること。

自然保護：地元の耕作放棄地等、手入れが行き届かない土地の保全や活用。放射能の除染について。

エネルギー問題：自然エネルギーの活用やエネルギーの地産地消。

文化：自然と共に歩んできた地域独自の歴史を振り返る。

個人として、これらの問題に全て取り組むことは難しいですが、子ども達の生活に根差した内容を扱う保育を通じて取り組むのであれば非常に効果的な取り組みになると思えました。よりこれらのテーマを私達の身近な物に感じてもらえるか工夫をし、自ら学んだ上で、子ども達、保護者、地域へ伝えていけるか挑戦していきたいと思えます。

文部科学省の幼稚園教育要領で教育目標として記されている、5領域「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」は幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となるものです。環境教育を通じてねらいとしているすべて内容を活動に盛り込むことにつながり、とても教育効果の高い内容であると思います。森のようちえんで最も大切にしている時間である自主性を育む自由遊びの時間は大切に確保しながら、子ども達が楽しみになるような園行事や、遠足などの一環の中でこういった環境教育も同時に行っていきたいと思います。

環境省では、水質改善の取り組みについて学ぶ中で、汚染の原因となっているのは、家庭排水、農業排水、人口過密地域で起こるリウマチの薬による薬害と伺いました。環境を汚染する側も顧客と捉えると、それぞれの汚染原因に対するアプローチも変わってくる。

「水をきれいに！」と一概に説いても実際に私達の暮らしをどうゆう風に変えていけばよいのか分からなかった私にとって、対抗勢力も顧客という概念は問題に対してどうアプローチすればよいか考える際に非常に参考になりました。

NABUの職員の方に「持続可能な社会を作る為に個人の生活の中で気をつけている事はありますか？」との質問をしました。

答えは「車にできるだけ乗らない、地産地消の食物やエコロジカルな購買をする。お庭の生物多様性を大切にする。」といったとてもシンプルな事でした。

個人で行っている事は微力ながらも愛に溢れた行動だと思いました。そしてそんな彼らが力を合わせると、会員50万人の巨大な力となり、自然を守り、政治的な影響を持つまでとなる。そんな流れを作るには、全国の環境NPOリーダーが繋がり、協力していく事が必要と感じます。今回学んだ、顧客満足、ファンドレイジング、人材育成等を地域で実践しながら、様々な方と協力し、持続可能な社会を作る実践を行っていきます。

BUNDやNABUの現場でFÖJ制度という16歳から26歳の人が一年間自由意思でボランティア活動していることを知りました。ボランティアという立場でも責任のある立場を任せていました。安全管理に気を付けながら当NPO法人に関わるボランティアにもやりがいを持って成長が促されるような関わりも改めて検討していきたいと思います。

私の夢は「持続可能な自然環境を守る活動を地域から発信し、その実践を通じて次世代を担う宝のような子どもたちの成長をサポートしていくこと。」です。

今回の研修を通じて改めて保育現場の懐の深さ、奥深さに気づき感動しました。環境保全、環境教育という視点から保育を深めていける大きなきっかけになりました。

ところで、私は以前よりネイティブアメリカンの精神性や、森羅万象に神を

見出す日本古来の自然崇拝の考え方が好きでした。今回の研修の主軸となる「顧客満足」という考え方は、結局「私につながるすべての命」を考える、「七代先の事を考える」ことに繋がっていると気づきました。ネイティブアメリカンや、日本古来の森羅万象への姿勢と同じ物を感じます。

私たちを取り巻く環境問題に保育を通じてアプローチしていく。これからも子ども達への環境教育が持続可能な未来を担う人材育成へとつながっていくと信じて実践の日々を送っていきます。